

日韓の王陵および壁画古墳の比較研究序説

－飛鳥時代と高麗・朝鮮時代を中心に－

廣瀬 寛

1. はじめに
2. 飛鳥時代以降の王陵および壁画古墳の展開
3. 統一新羅以降の王陵および壁画古墳の展開
4. 飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の王陵および壁画古墳の共通性の背景
5. おわりに

要 旨 飛鳥時代末に築造されたキトラ古墳、高松塚古墳という2基の壁画古墳の特徴は、狭陰な石槨内に中国由来の星宿、四神、十二支像などを描く点にある。実はこれと類似した壁画古墳は高麗時代や朝鮮時代前期にも存在する。小論では、壁画古墳と密接な関係にある王陵のあり方も含めて、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の墓制を比較することで、時代や地域も異なる両者の間で、似通った壁画古墳が出現した背景を探った。

両者の墓制の基本的な共通項としては、第一に、選地への風水思想の影響とともに、埋葬施設の小型化、すなわち「槨」化の進行を指摘できる。飛鳥時代、高麗・朝鮮時代の壁画古墳は、そうした「槨」化した狭陰な埋葬空間に対して、本来的には多様な内容を有する中国由来の壁画を半ば強引に押し込める必要があった。その際、飛鳥時代、高麗・朝鮮時代ともに、不可欠の描画対象として星宿、四神、十二支像を選択したことになる。そこからは、双方の社会に、皇帝を中心とする中国由来の支配理念に基づいて自国内の政治的支配を強化しようとする共通した政治的姿勢が存在した様子をうかがうことができる。

巨大な唐に対峙すべくその政治機構や礼制の導入が図られた飛鳥時代と、同様に宋・元・明と向き合った高麗・朝鮮時代とでは、中国に対する政治的姿勢に一定の共通性があり、中国的な王陵への志向もその一環として評価し得る。この点こそが、大局的には、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代に類似した墓制を生んだ要因と考えられる。

キーワード 飛鳥時代 高麗時代 朝鮮時代 王陵 壁画 星宿 四神 十二支像 石槨

1. はじめに

2009年11月に国立中原文化財研究所から刊行された『原州桐華里盧懷愼壁画墓発掘調査報告書』を手にとった時、脳裏に衝撃が走った。壁画細部の表現こそ異なるものの、これまでの私の知識にあった三国時代のどの壁画古墳よりも、飛鳥の壁画古墳との親近感がそこにあったからだ。カラー図版には、日本で横口式石槨とよんでいるものとよく似た構造の埋葬施設の内壁に星宿、四神、十二支像が描かれるとともに、所々で石材の隙間から流れ込んだ褐色の雨水が壁面を汚している様が鮮明に映し出されていて、さながら高松塚古墳やキトラ古墳の石槨内を見るかのようであった（第1図）。

そもそも、星宿、四神、十二支からなるキトラ古墳壁画と構成が完全に一致するものは、広く東アジアを見渡しても、現状では盧懷愼墓以外に見当たらない。石槨内部の規模が奥行2.7m、幅1.1m強、高さ1.12mと非常に似通っていることに加え、石材間の目地に外面から漆喰を充填し、周囲を版築で固めながら石槨を構築するという技術的な類似も、両者の親近性を一層煽った。

時代や地域が全く異なるにも関わらずなぜこのような共通性が生じたのか、それを考えることが飛鳥の壁画古墳の歴史的背景を理解する新たな切り口になるのではないか。はなはだ素朴ではあるが、この点が小論執筆のきっかけである。奇しくも、高松塚古墳の壁画修理のための石槨の解体調査¹が2007年に実施され²、盧懷愼墓の解体移築調査はその翌年に実施された。日韓両国で、近接した時期に壁画古墳の解体調査が実施されていたわけで、このことも両者の関係を単なる偶然として済ませたくないという筆者の気持ちに拍車をかけた。

このように小論は、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の王陵や壁画古墳の比較という新機軸を打ち立てることにより、いささか行き詰まり感のある飛鳥時代の古墳研究に新たな風を吹き込もうとするものである。また、時代も地域も異なるが、両者に似通った墓制を生じさせた歴史的要因を追求することで、高麗・朝鮮時代の壁画古墳に対する理解を深めることにも寄与する部分があると考えている。研究は未だ構想段階を脱しておらず、またそもそも現在の筆者の力量を超える問題であることは重々承知しているが、ここでは本共同研究を通じて得られた現段階までの理解と今後の展望を中心に記述することとする。

2. 飛鳥時代以降の王陵および壁画古墳の展開

飛鳥時代 日本では7世紀にはいると、それまで規模の巨大さを競って築かれた前方後円墳は姿を消し、同時に王宮や王陵は飛鳥やその周辺に築かれるようになる。飛鳥時代前半の王陵級の古墳は、一辺60m前後の方墳で、埋葬施設には大型の石材を組み上げた横穴式



盧懷愼壁画墓2号石室

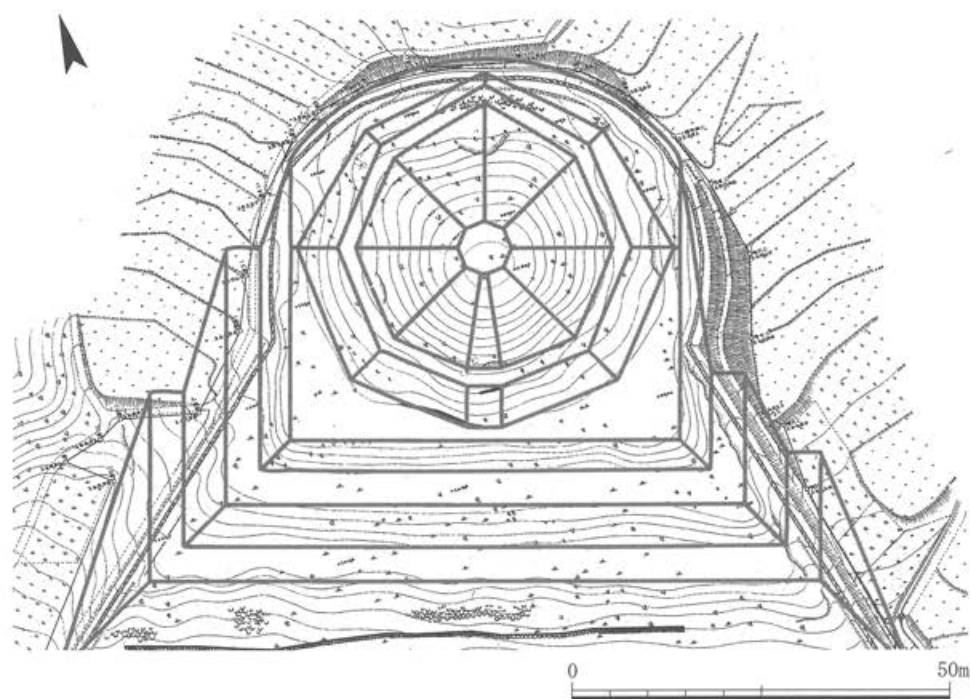


高松塚古墳石槨

第1図 盧懷愼壁画墓と高松塚古墳の石槨内の比較

石室が用いられた。使用された石材は硬質の花崗岩類（石英閃緑岩など）が主体で、当初は自然石であったが、やがて寺院建築の礎石や基壇外装石の加工技術を応用して人工加工された石材（切石）が、石室の構築にも用いられるようになる。また立地面では、谷の奥まった部分の南斜面を好んで古墳を築くという特徴があり、中国南朝における堪輿術（風水術）の影響が指摘されている³。

飛鳥時代中頃には、段ノ塚古墳（舒明天皇陵）を嚆矢に王陵は八角墳となり、以後、飛鳥時代末まで八角墳の築造が続く。段ノ塚古墳では、南斜面に3段にわたって段を巡らせており（第2図）、下から見上げた際に古墳全体を大きく見せる効果をねらったものと推測されるが、こうした段状の施設は同時期の王陵以外の古墳でもしばしば採用されており、段ノ塚式古墳と呼称されている⁴。またこの頃から、上位階層の埋葬施設には棺を納めることができる程度の狭い空間からなる横口式石槨が採用され、棺は持ち運びが可能な有機質製の漆塗棺が用いられるようになる。横口式石槨の使用石材は、当初は硬質石材（石英閃緑岩、石英安山岩）が主体であったが、次第に軟質の凝灰岩が用いられるようになり、キトラ古墳や高松塚古墳など、飛鳥時代末の石槨では、規格的に加工した石材の接合面に仕口を設け、それら10数枚を計画的に組み合わせて構築されるようになる。さらに、墳丘構築には土囊積みや版築工法が用いられ、完成した墳丘の表面には凝灰岩を加工した外装石が貼られる



第2図 段ノ塚古墳（舒明天皇陵）の墳丘

場合もある。こうした凝灰岩加工や版築工法も、寺院の基壇構築を通じて培われた技術が応用されたものと考えられる。

なお、日本で最初の中国式都城である藤原京の造営に着手した天武天皇の陵は、藤原京の朱雀大路の南の延長線上に正確に位置しており、天武天皇陵が藤原京と一体的に設計、築造されたことを物語っている。藤原京で治世を送った持統天皇と文武天皇は、史料から火葬されたことが知られており、持統天皇の遺骨は夫の天武天皇の陵に追葬された。文武天皇の陵は、天武・持統天皇陵に近接する八角墳で、骨蔵器を納めることができる程度の小規模な横口式石槨を埋葬施設とする中尾山古墳であることが確実視されている。

奈良時代以降 奈良時代以降の王陵（天皇陵）は、墳丘の小型化や薄層化がさらに進行することに加え、陵墓に対する立ち入りが制限されていることもあって実態は詳らかではなく、文献の記録を中心に断片的にその様相が把握されているに過ぎない。奈良時代前半の元明・元正天皇は、持統・文武天皇に続いて火葬され、目立った墳丘が築かれなかったものと推測される。しかしながら、奈良時代後半の聖武・称徳天皇は火葬されてはおらず、称徳天皇陵については役夫6300人の動員が史料にみえることから、両天皇の陵はそれ相応の規模をもつ「山陵」型式であった可能性がある。ただし、両者とも墓前に寺や庵が置かれ、その葬礼は仏式で執りおこなわれた。

平安時代初頭の桓武天皇陵についても、実態は不明ながら一定規模を有する「山陵」型式であったとみられている。桓武天皇は、当初、平安京西北の「宇太野」に役夫5000人を動員して造営することが計画されたが、最終的に京東南の「柏原」の地に築かれた。鎌倉時代の柏原陵に対する盗掘記録（日野資宣『仁部記』）は、「山陵は登るに十丈（約30m）ばかり、壇は巡ること八十丈（約240m）」と記す。その一方で、桓武の子である淳和天皇は、火葬の後に散骨され、続く仁明天皇以降、陵上への卒塔婆の建立が始まるなど、奈良・平安時代の王陵のあり方は一様ではない。

その後、平安時代中期の円融天皇以降は、寺院内に陵が置かれるようになる。その形態は判然としないが、陵と言っても寺境内に置かれることから、やはり小規模な墳丘が築かれる程度であったとみられる。さらに平安時代後期以降は寺内の塔・堂内に埋骨する形態が主体となり、墳丘自体が築かれなくなる。鎌倉時代には、四条天皇が平安京東南の泉涌寺の後山に埋葬されたことを契機に同寺が天皇家の菩提所となる。室町時代後期の後光厳天皇以降は、泉涌寺が天皇家の葬儀・荼毘所となり、江戸時代初期の後水尾天皇以降、幕末までの歴代の天皇は、同寺に九重の石塔を置いて土葬された。

壁 画 古墳時代の九州を中心に盛行した幾何学的な文様や原始的な絵画を描く「装飾古墳」を除くと、日本列島の壁画古墳はこれまでのところ、飛鳥時代末のキトラ古墳、高松塚古墳の2基のみである。両古墳は凝灰岩製の横口式石槨を埋葬施設とし、その内壁に下

地の漆喰を塗布したうえで、鉱物性の顔料を用いて、キトラ古墳では、星宿、日・月像、四神図、十二支像、高松塚古墳では星宿、日・月像、四神図、男女の人物像を描く。壁画の系譜については、下地に漆喰を塗り、念紙を用いて予め刻線の下書きをおこなう手法や、高松塚古墳と中国・西安の永泰公主墓との人物像の類似などからみて、両古墳の壁画は中国・唐の壁画墓の影響を受けたものとみるのが妥当である。

墓誌が存在しないことから、両古墳の被葬者については明確ではないが、両古墳とも天武・持統天皇陵や中尾山古墳に近接する藤原京の西南部に築かれている点、唐に由来する当時の最先端の知識や技術に裏打ちされた壁画の内容、金銅製の飾金具をあしらった漆塗木棺の使用からも、その被葬者は皇族や上級官人とする見方が有力である。筆者自身は、藤原京の西南の地には、天武、持統、文武の三天皇のほかにも、史料から斉明天皇や間人・大田皇女、草壁・川島皇子らが葬られたことが推定できることから、キトラ古墳、高松塚古墳の被葬者も皇族級の人物である蓋然性が高いとみる。

3. 統一新羅以降の王陵および壁画古墳の展開

統一新羅 統一新羅期の王陵は、新羅王京を取り囲むように京の郊外に分散して配置される。各王陵は、南を正面とし、北側に山ないしは小丘を背負うものが多く、選地に風水的な観念が及んでいたことがうかがわれる。墳丘は円墳を原則とし、周囲に切石による護石や十二支像、欄干を巡らせ、鎮墓獣としての獅子像を置くものが多い。詳細な発掘調査が実施された事例が少ないため、埋葬施設の構造については不明な点が多いが、神堂里1号石室墳や龍江洞古墳などの王陵に準じる墳墓の事例から、統一新羅初期の王陵の埋葬施設は割石を用いた横穴式石室と推測され、その後、九政洞方形墳などの事例から、遅くとも8世紀後半以降には切石積の横穴式石室へと変遷していくものと考えられる。

護石については、当初は川原石を積み上げる構造であったものが、7世紀中頃に比定される善徳女王陵⁵の段階で粗雑な割石を用いるようになり、さらに7世紀後半の閔哀王陵や神文王陵の段階では完全な切石状のブロックを積み上げる構造に発展する。こうした護石の発達過程と、上述の埋葬施設の変化は、同じ花崗岩切石を使用した構造物の展開として、パラレルな関係にあるものと推察される。

そして8世紀前半に比定される聖徳王陵の段階で、地台石（地覆石）、面石（羽目石）、幟石（束石）、甲石（葛石）を整然と組み合わせる基壇状の護石で墳丘裾を区画し、その周囲に十二支像を配置するようになる。景德王陵以降は、聖徳王陵では立体の神将像であった十二支像が束石外面に浮き彫りされて護石内に取り込まれ、これがその後の新羅王陵のスタイルとして定着する。さらに、8世紀末から9世紀前半に比定される掛陵や興徳王陵では、南側の墳丘へのアプローチ部分の東西脇に文人や武人、胡人の石造が配置される。

こうした王陵のスタイルが発達、確立していく背景には、同時代の唐を基本とする中国の皇帝陵からの影響があったとみて間違いない。

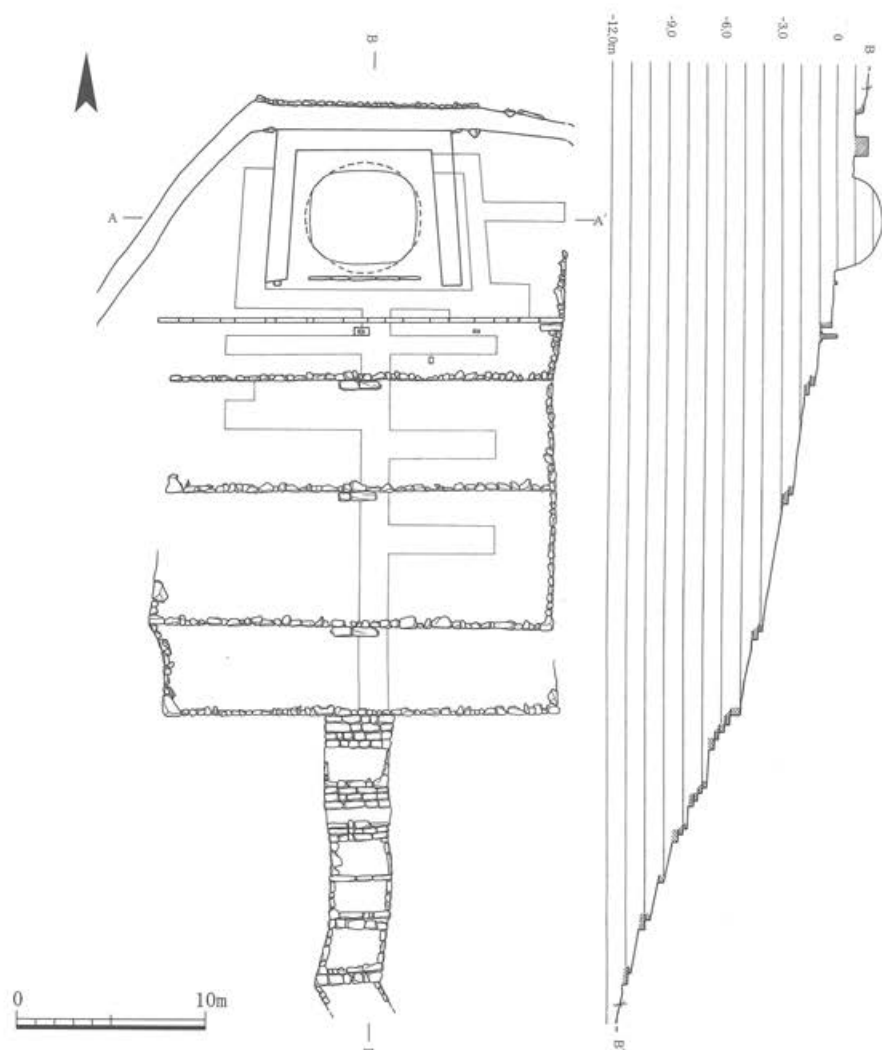
高麗 高麗の都・開京は朝鮮民主主義人民共和国内にあり、その王陵も大半が開京周辺にある。発掘調査が実施されたものが少ないため、詳細については不明な点が多いが、丘陵の南斜面に門丘を築き、周囲に護石と欄干を巡らせ、その前方に文人・武人の石造物を配置する点を特徴としており、その基本的なスタイルは新羅王陵のあり方を踏襲したものと理解できる。ただし立地は、新羅王陵よりも急傾斜の地を選ぶ傾向があり、墳丘の前面には二重、三重に壇状施設や階段が設けられ、王陵以外でも同様の施設を設ける場合が多い。その構造は、前述の日本の飛鳥時代に盛行する段ノ塚式と呼ばれる墳丘前面の段構造によく似る。墳丘自体を間近に見せるのではなく、南前方の低い位置から仰ぎ見せる意識が新羅王陵よりも相対的に強まっていると評価することができよう。

対モンゴル抗争期にあたる13世紀に江華島に築かれた碩陵、坤陵、嘉陵でも、そうした造墓・選地の理念を明瞭にみとることができる。これら江華島の王陵については、発掘調査および整備が実施されており、今回の共同研究でも現地を踏査することができた。いずれも平地からは幾分、分け入った山腹に築かれており、現在、周囲は樹木に覆われている。仮に築造当時、樹木に覆われていなかったとしても、山下から目視することは困難のように感じられた。むしろ山腹に立地しながらも、背後に山を背負うように南斜面を厳密に選択する点には、視覚性よりも風水的思想を一層重視する姿勢を看取することができよう。

江華島の高麗王陵は、モンゴルとの抗争期の造営ということもあり、埋葬施設や周囲の石造物も比較的簡素であるが、高麗末の恭愍王陵では、獸冠人身の十二支像や雲文、靈芝文を彫刻した護石や欄干、石灯籠を配し、さらに周囲に虎、羊の石造物を置く点で、それまでの高麗王陵からの飛躍が認められる。

朝鮮 高麗末期の恭愍王陵にみられた造形美豊かな石造物は、ほぼそのまま朝鮮王陵へと引き継がれる。墳丘周囲の構造については、高麗末期と朝鮮前期の王陵は、ほぼ同一と言ってよい。ただし、朝鮮王陵では、墳丘を取り囲む陵寝空間のみならず、丁字閣を中心とする祭祀空間や、祭祀の準備等がおこなわれる養室を中心とする進入空間が付設、整備され、新羅・高麗王陵とは兆域内の空間構造において相異が存在する。

また立地も、周囲を山で囲まれた谷間を選び、その谷奥から突き出した小さな尾根上に陵寝を置くことを原則としており、谷中をながれる流路は風水に言う明堂水にあたるとされる。希に単独で立地する場合もあるが、多くの場合、複雑に入り組んだ一定の広がりをもつ谷を複数の王陵が共有する形態をとる。朝鮮王陵では、史料や山陵図の存在から、その選地は厳格な風水思想に依拠していたことが明らかであり、王陵の選地に対する風水上の吉凶をめぐる、術官や官僚の間で激しい論争へと発展する場合もあった。こうした葬

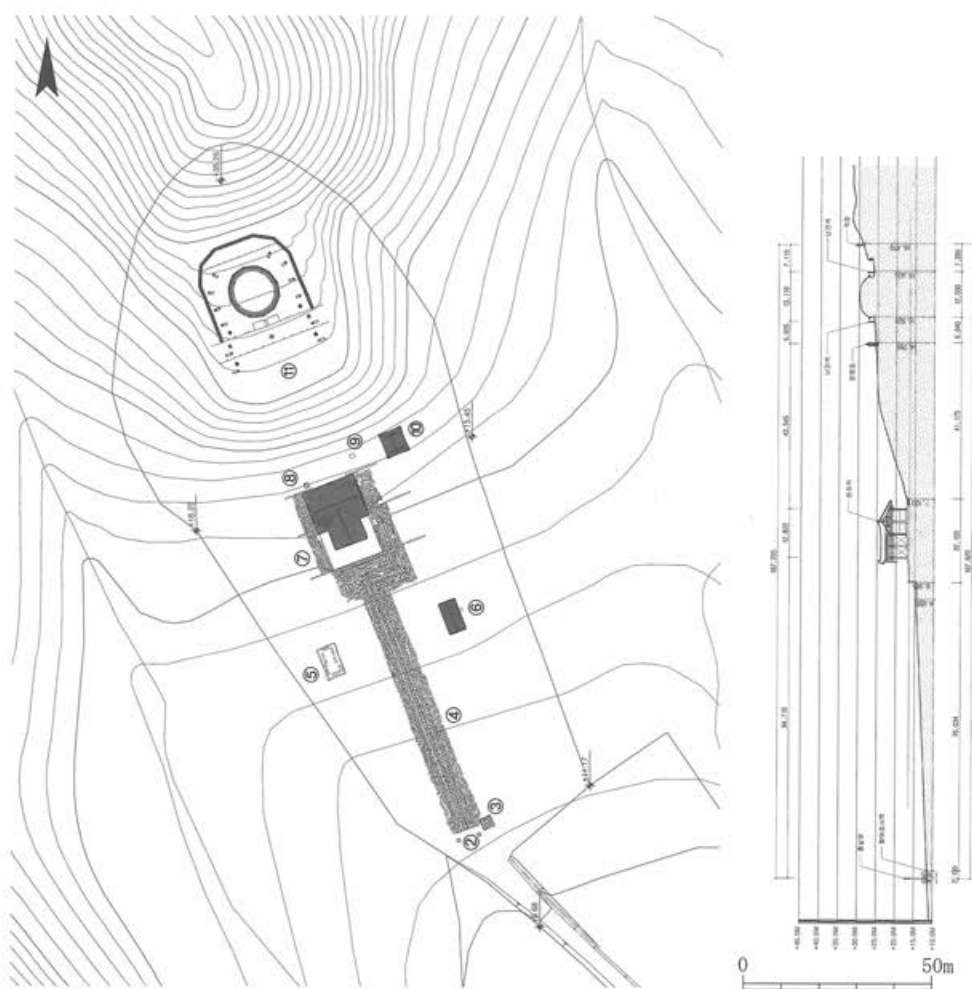


第3図 高麗王陵（江華碩陵）の墳丘

送上の理念に明確に裏付けられた選地のあり方は、史料の希薄な時代の王陵の造営方法を考えるうえで大いに示唆に富む。

壁 画 朝鮮半島の壁画古墳については、集安や平壤周辺の高句麗壁画や、百済・宋山里6号墳や陵山里1号墳の四神や蓮華文、順興・於宿知述干墓や邑内里壁画墓など、三国時代の事例がよく知られている。

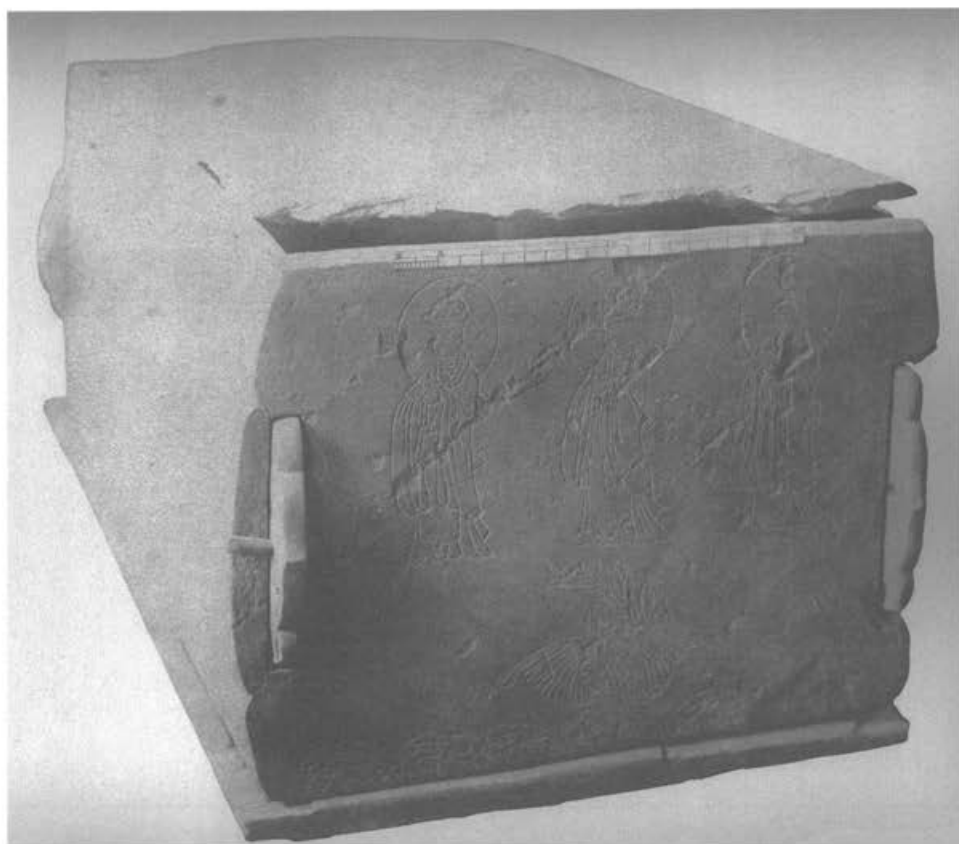
これに対して、新羅王陵では、横穴式石室の四壁と棺床に黄・朱・群青・紺青・白の五色を彩色した神徳王陵を除くと、これまでのところ確実な壁画古墳は発見されていない。前述のように、護石に十二支像を配置するあり方からすると、新羅王陵では、墓室内よりも外部から視認が可能な墳丘外表面に、十二支像による墳墓装飾の場を設けた可能性が考



第4図 朝鮮王陵（仁祖 長陵）の墳丘と兆域

えられる。ただし、龍江洞古墳のように、石室内から陶俑や青銅製十二支像が出土した例があることから、唐墓制の影響を受け、埋葬施設内にも墳墓装飾の場が同様に設けられていた可能性は十分考慮しておく必要がある。

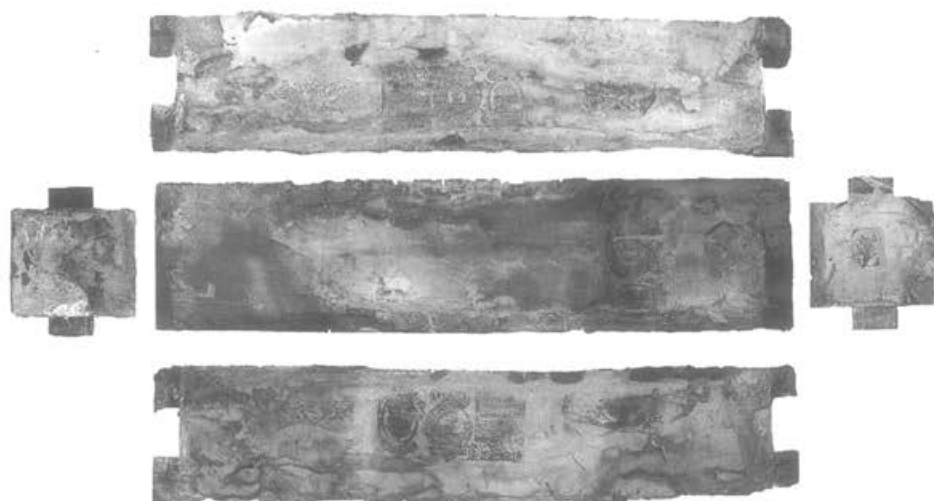
高麗王陵では、前述のように、正式な発掘調査が実施された古墳がほとんどなく、内部構造の詳細が判明する王陵は、恭愍王陵の他にはない。その恭愍王陵では、3m四方の玄室に星宿、四神、十二支像を描く。同様の壁画古墳は、京畿道水落岩洞1号墳や坡州・瑞谷里壁画墓でも発見されている。また高麗の石棺では、棺身外面の四壁に四神を描くものがあり、仁宗22年（1144）の紀年をもつ許裁石棺では、四神とともに十二支像を描く（第5図）。これらの事例から、高麗の墓制では星宿や四神、十二支像を墓室や棺に描くことが一般化していた状況が理解できる。



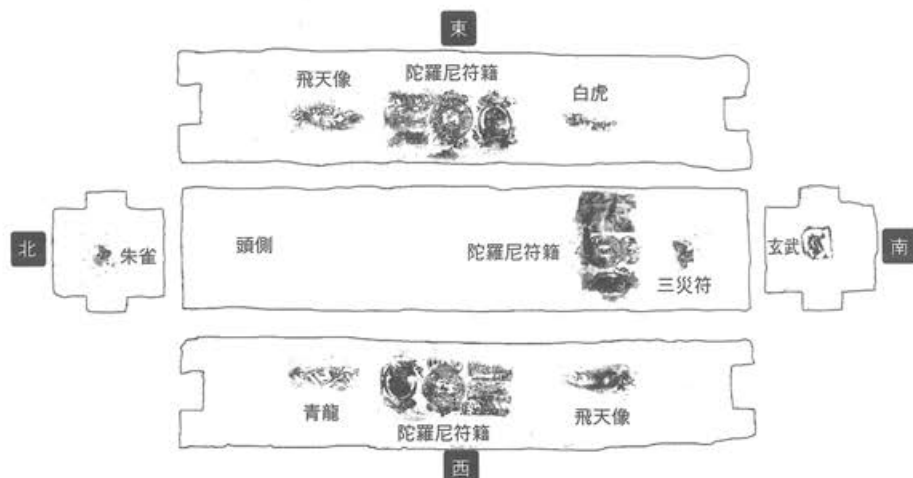
第5図 許裁石棺の十二支像と朱雀

高麗の壁画で注目されるのは、十二支像の表現である（第5図、第7図右上）。日本のキトラ古墳壁画や新羅王陵の十二支像が獣頭人身像であるのに対し、高麗のそれは、官人風の男性の冠に干支が乗る姿として描かれる冠獣人身像となっている。同様の冠獣人身像は福建省尤溪麻洋宋壁画墓（第7図右下）や遼の皇帝陵周辺の墓誌画像に類例があり、日本の平安末期以降の十二神将像でも、奈良・室生寺像のように頭上に十二支を表現するものが現れる。中国における十二支像は、唐後期の8世紀後半には獣頭人身像に加えて、胸に干支を抱くものが現れることが知られている⁶。五代十国期の呉越二代王后馬氏を葬った浙江省臨安市呉越国康陵（939年、第7図左下）でも、胸に干支を抱く文官の姿が壁面に浮き彫り、彩色されている。冠獣人身像は、おそらくその後の遼、宋代に至って出現したものと推測される。いずれにしても、こうした十二支像の変遷は、中国王朝を起点とする東アジアで連動した変化とみて間違いなく、高麗の王陵やそれに準ずる墳墓ではそうした新たな十二支像の受容がみてとれることが重要である。

冒頭で取り上げた朝鮮前期の盧懷愼壁画墓も、冠獣人身の十二支像を採用しており、高麗の壁画墓のあり方を継承したものであることが明らかである。ただし、その表現には変



木棺展開状況の写真



木棺の展開図

第6図 丁聃夫婦合葬墓の木棺内の貼られた版画（星宿、四神ほか）

化もあり、とりわけ四神は、報告書が「多少こっけいでおどけた四神図の姿」と表現するように、高麗の石棺に描かれたものからは表現が著しく退化している。しかしながら、盧懷慎墓の1号石室と2号石室では、四神図の表現が酷似しており、これによく似た表現は安東・西三洞古墳でも確認できることから、共通した下絵が広く流布していた可能性が考えられよう。

発掘調査が実施されていない朝鮮王陵の壁画の実態は不明だが、王・王后陵造営に関する記録である『山陵都監儀軌』には、櫓宮と呼ばれる木材を組み合わせた槨の内面に、紙に彩色された四神図が貼り付けられたことが記されている。朝鮮王朝の礼制を記した『国朝五礼儀』（1474年）や『国朝統五礼儀』（1744年）にも同様の記載があり、後者には石室

天井に日・月と星宿を墨書し、四壁に四神を配置したことが記されている。星宿や四神からなる壁画が朝鮮王陵において必須となっていた状況が読み取れる。

なお、紙に描いた四神を埋葬施設の内壁に貼り付ける実例は、朝鮮時代の副司直であった丁聃の夫婦合葬墓（16世紀前半）を通じて確認できる。そこでは、灰隔墓内に収められた木棺の内面に星宿、四神、飛天、陀羅尼仏籍、三災符が墨摺りの版画で貼り付けられている（図6）⁷。本例は、一方では仏教や道教との習合のあり方を示唆するものの、日本の江戸時代併行期においても、朝鮮半島では星宿・四神図が葬送に伴って埋葬施設内に配置された状況を明確に示しており、『山陵都監儀軌』の記述の信憑性を裏付けるとともに、そうした葬制が王陵のみならず、官人層にも広く普及していた状況を物語っている。

4. 飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の王陵および壁画古墳の共通性の背景

前節まで、日本列島における律令国家形成期、朝鮮半島における統一新羅以降の王陵および壁画古墳の展開を概観してきた。日本の飛鳥時代、朝鮮半島の各王朝の王陵のスタイルは、各時期の中国・皇帝陵周辺の影響を少なからず受けていることは間違いない。しかしながら、日韓のあり方を俯瞰的に比較すると、朝鮮半島では、統一新羅期に成立した王陵のスタイルが、王朝が交替してもその基本的なあり方を大きく変えることなく維持されていくのに対し、日本列島では飛鳥時代の王陵のあり方はその後ほとんど継承されることがなく、奈良時代以降の王陵（天皇陵）は次第に目立たない存在となっていく、という対照的な図式を浮かび上がらせることができる。冒頭で指摘したようなキトラ古墳・高松塚古墳と朝鮮時代前期の盧懷愷壁画墓に一定の類似性が生じた背景として、そうした朝鮮半島の王陵およびそれに準ずる墓制に時代や王朝を超えたスタイルの一貫性が存在したことをまずもって指摘しておきたい。そのうえで、以下では、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代前期の王陵および壁画古墳の共通性と差異について、さらに詳細にみてみよう。

飛鳥時代と統一新羅以降の墓制の共通点としては、まず両者の立地が大きく堪輿術（風水思想）を背景としている点を指摘できる。無論、その源流は中国王朝にあり、東アジア世界に共通の観念が広く浸透した姿として評価すれば、取り立てて強調するまでもないかもしれない。しかしながら、古墳時代や三国時代の墓制では、必ずしも南が墳墓の正面とは意識されてはおらず、一方で飛鳥時代や統一新羅以降になって、埋葬施設が厳密に南開口となり、周囲の山や谷を意識した選地が明確化することを踏まえると、風水思想導入の背景には強い中国墓制への志向があったことは疑いない。飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の王陵やそれに準ずる墳墓が、南側に二重、三重に方形の段状施設を巡らせる点も、単なる偶然の一致とみるよりも、時代を超えて葬送上の思想や観念が共有された結果とみるべきであろう。

さらに、高麗・朝鮮時代の墳墓では、日本の飛鳥時代の横口式石槨のように非常に小型化



キトラ古墳（寅）



瑞谷里壁画墓（未）



呉越国康陵（馬）



尤溪麻洋宋壁画墓（未・申）

第7図 十二支像の比較

した埋葬施設が散見される点も注目される。発掘調査された高麗末の恭愍王陵の玄室規模は3×3mとされ、朝鮮王陵では、第2代定宗の定安王后の厚陵や、第3代太宗の元敬王后の獻陵（いずれも15世紀前半）において、玄室の内法規模がともに長さ11尺、幅8尺であることが史料から判明する。これらは、飛鳥時代の横口式石槨よりも規模はやや大きいのが、前述のように朝鮮王陵では、石槨内にさらに「櫨宮」と呼ばれる木材を組み合わせた槨が置かれるようで、その場合、石・木の二重槨となり、四神図が貼られる内槨部分の内法規模は上記の値よりもさらに狭隘になるとみられる。また、官人層の墳墓では、当然のことながら、石槨規模白体が王陵よりも一回り小型となり、盧懷愼壁画墓では長さ2.7m、幅1.1m、高さ1.12mと、高松塚古墳の石槨と各数値がほぼ一致する。いずれにしても、高麗末期から朝鮮時代前期の墳墓の埋葬施設は、内部に棺のみを納める程度の狭い空間であったとみてよい。

その後、朝鮮王陵およびその周辺では、第7代世祖の光陵（15世紀後半）以降、朱子『家礼』の記述に従って灰隔墓が普及する。灰隔墓とは、枰板を用いて石灰、炭粉、黄土、砂を混ぜた土を硬質につき固めて外壁とする埋葬施設で、内部に収められる木棺よりも一回り大きく構築される。第11代中宗の章敬王后（1515年没）は、最終的に西三陵（京畿道高陽市）の禧陵に改葬されたが、当初の陵の跡地は大母山の麓（ソウル市瑞草区）にあり、2008年に発掘調査が実施された⁸。この元禧陵の調査成果は、通常、内部調査が実施されることのない朝鮮王陵の実態を知るうえで貴重な事例となっている。埋葬施設は横口式の灰隔墓で、内法規模は長さ2.90m、幅1.62m、高さ1.42mを測る。素材や構築方法こそ異なるが、灰隔墓の形態や規模・構造は飛鳥時代の横口式石槨に酷似することがわかる。

こうした高麗～朝鮮時代の石槨・灰隔墓と飛鳥時代の横口式石槨の構造において、決定的に異なる点は、飛鳥時代の石槨が墳丘の最下部に築かれるのに対し、高麗・朝鮮時代のものは地下に築かれ、下降する通路で槨内に入出入りする点である。また、飛鳥時代のものは一墳丘に石槨一基を設けるあり方が通常であるが、高麗・朝鮮時代のものは、同一墳丘内に2基並列して墓室を設ける場合が少なくない。近年、飛鳥において八角墳であることが判明し、斉明天皇陵説が有力となった牽牛子塚古墳の埋葬施設は、一石の巨大な凝灰岩に2つの横口式石槨を横並びにして掘り込んだもので、一見すると高麗・朝鮮時代の石槨・灰隔墓を彷彿とさせる。『日本書紀』によれば斉明天皇は娘の間人皇女と合葬されたとされるが、高麗・朝鮮時代の双墳および双槨のものは夫婦合葬を基本とする点で異なっている。そもそも2基の石槨を並列するあり方自体が飛鳥の古墳では特殊な存在である。そうした細部の構造や単葬・合葬の相異はあるものの、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の王陵およびそれに準ずる墳墓では、埋葬施設が「槨」化しているという点では、基本的に共通していると言える。

そのうえで、上記のような構造の槨内に描かれる壁画に再度、着目してみたい。高麗時代から朝鮮時代前期の壁画墓は10例ほどが管見にのぼっている。高麗末の恭愍王の玄陵には、

第1表 日韓の王陵と壁画古墳の変遷

	日本列島			朝鮮半島				
	墳丘	倭	日本	墳丘	埋葬	主な壁画古墳		
	前方後円墳	竪穴式石槨	(装飾古墳)	高句麗	百濟	加耶	新羅	安岳3号墳 徳興里古墳
	方墳	横穴式石室		方墳 (積石塚)	方墳 円墳	円墳	円墳	於宿知述干墓 宋山里6号墳 陵山里1号墳 江西大墓
600				横穴式石室	横穴式石室	木槨	横穴式石槨	
	八角墳	横口式石槨	キトラ古墳 高松塚古墳	統一新羅				
700	墳丘 不明瞭化	火葬		円墳 (割石積護石)	横穴式石室 (自然石・割石積)	火葬		
	卒塔婆			(切石積護石)	石造物 十二支像 文人・武人・獅子	(切石積)		
900		塔・堂内 納骨		(基壇状護石)	高麗			
				円墳 (基壇状護石) (前面段状施設)	石造物 文人・武人 虎・羊等			
1200						横口式石槨化		
1400				円墳 (基壇状護石)	朝鮮			瑞谷里壁画墓 屯馬里壁画墓 恭愍王 玄陵
				石造物 文人・武人 虎・羊等				桐華里盧懷慎墓 西三洞壁画墓
1600	九重石塔	土葬		丁字閣・賽室等		灰隔墓		丁聃夫婦合葬墓

星宿、四神、十二支像、花、竹、松、人物が描かれており、前述のように、朝鮮王陵にも星宿、四神などの壁画の存在が推測できる。さらに、官人層の墓では、盧懷慎墓の1号石室と2号石室において極めて似通った四神図が描かれており、前述のように、これに酷似するものは安東・西三洞古墳でも確認できることから、共通した下絵の流布が推測できる。丁聃の夫婦合葬墓のように版画を貼って壁画とする事例の存在からも、高麗・朝鮮時代では、王陵のみならず、上位階層の墓で壁画が一般的に描かれていたものとみて間違いはない。

その壁画の内容には、風俗画や仏教・道教関連のものも見られるが、主題が星宿、四神、十二支像にあったことは明らかである。描写の細部表現こそ異なるものの、この点は、飛鳥時代のキトラ古墳や高松塚古墳と同様である。十二支像が古代の獣頭人身像とは異なり、

冠獣人身像となっていることが端的に示すように、高麗・朝鮮時代の星宿、四神、十二支像の描き方には、その時々中国の影響が及んでいることは確かであろう。しかしながら、それらが描写対象として選択される背景には、天上と地上における時空の正しい運行に基づく皇帝中心の政治的な支配理念が存在するとみて問題なかろう。実際に、高麗・朝鮮時代前期には「五福太・信仰」が展開しており、朝鮮半島で完結する分野説が存在したことが指摘されている⁹。

加えて、飛鳥時代や高麗・朝鮮時代の槨内は、中国の壁画墓の埋葬施設とは比較にならないほど狭隘で、そもそも壁画を描く空間が著しく制限される点が重要となる。中国では、飛鳥時代に併行する唐代、さらには高麗時代に併行する宋代でも、王陵を中心に、星宿や四神のほかにも、人物や建物、風俗画などさまざまな壁画が広大な墓室内に描かれるが、キトラ・高松塚古墳や高麗・朝鮮時代の槨化した埋葬施設では、そもそもそうした多種多様な壁画を描くための広いキャンパスが用意されていない。そのように描画空間が著しく制限を受けるなかで、飛鳥時代、高麗・朝鮮時代の両者とも、主題として選択したのが星宿や四神、十二支像だったのである。このことは、星宿、四神、十二支像こそが葬送壁画において不可欠の題材であったことを示していると言える。その背景には中華帝国で培われた皇帝を中心とする政治的な支配理念を自らの政治的領域でも再現し、その支配を正統化していこうとする共通する意識の存在をうかがうことができよう。

日本で壁画古墳が登場した飛鳥時代末は、巨大な中国・唐王朝の脅威に対向すべく国内の中央集権化が急がれた時期にあたる。その具体策としては、対峙する唐の先進的な政治機構や礼制（律令制）をむしろ積極的に取り入れるという方法がとられた。キトラ古墳や高松塚古墳にみる極彩色壁画の技法や思想的内容も、唐の壁画墓の直接・間接的な影響下にあったとみてよい。両古墳の壁画に関する知識は、704年の第8次遣唐使の帰国による唐との交流再開を通じて受容されたものとみる説が有力である。しかしながら、上述のように、キトラ・高松塚古墳の埋葬施設は、飛鳥時代を通じて小型化、簡素化が進行した最終段階の横口式石槨であり、両古墳の壁画は唐の墓室壁画の内容をそうした狭隘な空間に半ば強引に押し込めた姿だったのである。

高麗・朝鮮時代の壁画の展開も、基本的にはこうしたキトラ・高松塚古墳壁画が出現した過程と同様であったと言える。当然のことながら、両者に文化的接点は存在しない。また、先にみたように、高麗は外交関係を有した中国・宋の墓室壁画の内容を新たに取り入れていた。その一方で、高麗でも「槨」化した狭い墓室内にその内容を全て描き切ることは困難であった。高麗壁画墓のなかには、仏教画や風俗画を描いたものもあるが、やはり最も重要視されていたのが、皇帝を中心とする政治支配の理念を象徴するものとしての星宿、四神、十二支像だったと考えられる。そうした高麗時代の墓制は朝鮮時代前期の墓制にも受け継

がれ、冒頭でみたような虚懐愼墓の壁画が生まれたと考えられる。

ところで、朝鮮史研究者の奥村周司は、高麗王朝が挙行した圜丘祀天礼をとりあげ、中華帝国において皇帝権の正当性に関わる祭祀として皇帝が挙行する固有の祭天礼を高麗王権が実施した点に、高麗王権による中華帝国の世界観の内面化を読み取っている。その一方で高麗が導入した圜丘祀は、中華帝国に忠実な冬至祀としてではなく、祈穀・雩祀を対象としたものであった点、祭祀挙行に際して外国人使客を除くとともに、輿服・奏楽は皇帝ではなく王侯に対するものを導入した点に着目し、中国との宗属関係に矛盾する要素が排除されていることを指摘する。そうした状況に基づいて、奥村は高麗王権について、「二重構造的な独自の世界秩序を形成することによって、中華帝国との宗属関係を外交の基調としつつも、自立・自尊の姿勢を維持し続けた」と評価している¹⁰。こうした中国王朝に対する自立・自尊意識は、一時的な高麗国王に対する「皇帝」号の使用¹¹や自国独自の年号の制定からもうかがわれる。

こうした中国王朝を睨んだ対外意識は、天命による王朝交替の正統化、前述した自国内での分野説や圜丘祀の継承から、朝鮮王朝へも引き継がれたことが、山内弘一によって強調されている。重要なのは、それらの自立・自尊意識の素材がことごとく「文化的には中国的な発想にそっている」¹²点である。

以上のような高麗・朝鮮王朝の対外意識や祭政のあり方は、唐の政治構造や支配理念、礼制を導入することで唐に対峙しようとしていた律令国家成立期の日本の状況に類似する部分が少なくないと言えよう。すなわち、中華帝国に対峙する一方で、その手段としては相手方の祭祀や政治体制を積極的に受容せざるを得ないという二面性を、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代前期に共通した歴史的背景として捉えることができよう。ひいてはそのことが、両者の社会によく似通った壁画古墳を生じさせたひとつの要因であったと考えられるのではなかろうか。

無論、風水にもとづく土地の選択、星宿、四神、十二支自体は、元来、近代以前の東アジア社会に普遍的な文化ではある。しかしながら、日本の壁画古墳は飛鳥時代末に2基が確認されているのみであり、高麗・朝鮮時代に併行する時期には全く存続しない。それどころか、日本の王陵は、奈良時代以降、仏教とのつながりを深め、やがて明確な墳丘を築くことすらも放棄していく。そもそも、奈良時代以降の天皇陵は、「必ずしも同時代墓制の頂点あるいは核となって」はおらず¹³、この点でも常に「同時代墓制の頂点」であり続けた統一新羅、高麗、朝鮮の王陵とは大きく異なる。

一方で、日本の古代・中世では、先行する時代の王陵に対して、政変や天変地異等の報告、皇位継承の正当性の確認などをおこなう祭祀は継続しており¹⁴、祖先の王陵を崇拝する意識が存続したことは間違いない。それにも関わらず、同時代的な王陵は社会に対する視覚性

や存在感を失っていき、当然、壁画も無用のものとなっていったのである（第1表）。このようにみえてくると、日本の王陵を中心とする墓制において、飛鳥時代こそが最も中国的な王陵のスタイルが意識された時代であったと評価することができよう。中国の王陵の構成要素の一つである壁画が、飛鳥時代の末期に断片的に導入されながらも、その後に継承されなかった点も、そうした文脈で理解できるように思う。

では、日本の王権で中国的な墓制が衰退する一方で、朝鮮半島ではなぜ近世までそれが存続するのか。この点に関して、世界各国の王陵を比較考古学的な視点で叙述した都出比呂志は、中国や朝鮮半島での王陵存続の要因についても触れ、中国での伝統的な祖先崇拜と王朝交替の激しさが、「天の神たる昊天上帝から王権の正当性の証しをうる祭り」の継続につながったと指摘する。さらに宗廟・王陵祭祀は儒教儀礼の重要な要素ともなり、それが朝鮮半島でも「王陵を継続させる思想原理となった」と的確な評価を下している¹⁵。ただし、都出は、そうした中国・朝鮮半島との比較から、日本の中・近世における王陵の衰退・断絶という現象には注意を払っているものの、その背景を積極的に論じてはいない。

筆者は、前述のように、律令国家形成期の日本が同時代の中国の政治制度や礼制を積極的に取り入れ、その一環として中国的な王陵や古墳壁画を一時的に導入しながら、その後は衰退の一途をたどる点、一方で朝鮮半島では統一新羅以降の王陵のあり方が各時期の中国からの新たな影響を受けつつ継続することを踏まえると、奈良時代以降、日本で王陵が衰退する本質的な理由はそうした中国王朝に対する意識の後退に求めることができるのではないかと考える。

この点に関しては、高麗王朝の自尊姿勢を多角的に分析する森平雅彦の論考が大いに参考になる。論旨は多岐に及ぶが、その冒頭で森平が、朝鮮の歴代王朝が「間近にそびえる大陸の王朝の巨大な存在圧に対し、きわめて現実的な対応を迫られながら、いっぽうでは国内や近隣地域に対してみずからの権威を発揚してゆくという難題に、つねに直面していた」とし、「その切実さたるや、地政学的な条件から中国王朝に対して政治的に距離をおくことができた日本列島の政権など比較にならないものがあった」と述べている点は大いに示唆的である¹⁶。すなわち、朝鮮半島で王陵が存続した背景としては、中国と同様に王朝交替が繰り返えされたことや儒教信仰に加えて、大局的には、そうした中国王朝との緊張関係が中・近世にも絶え間なく持続したことに大きな要因が求められるのではなかろうか。

他方、日本の王陵の衰退現象については、中・近世における朝廷、武家、寺社をめぐる複雑な権力構造、信仰・宗教観の問題など、日本史の範疇において個々に検討すべき課題も多々ある。しかしながら、この問題は同時代的、或いは一国史的な検討では、必ずしも十分な解答を用意できないのではないかと考える。中国王朝をとりまく東アジア世界を対象に、かつ長期的な視野から、王陵や壁画古墳の比較研究を今後さらに深化させることで、

それぞれの時代・地域における王権の歴史的特質や政治的姿勢が一層明らかになるものと期待する。

5. おわりに

以上、雑駁な記述になったが、時代や地域も異なる飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の王陵や壁画古墳をあえて比較研究する意義や手がかりを探ってみた。両者に似通った墓制や壁画古墳が出現した要因としては、まず、日本列島も朝鮮半島も、古代国家の形成期以降、巨大な中華帝国に対峙すべくその政治機構や礼制を積極的に導入するという共通した対外意識が存在したことを指摘できる。しかしながら、日本では奈良時代以降、そうした意識が徐々に後退し、中国的な王陵が衰退したのに対し、朝鮮半島では統一新羅以降も王陵がその基本スタイルを大きく変えることなく存続した。飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の墓制の類似性の背景は、大局的には時代こそ異なるものの、両者がともに中国的な王陵を受容したことに求められる。

加えて、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代では、両者とも埋葬施設の小型化、簡素化、すなわち「柳」化が進行する過程が存在しており、その流れの中で共に中国に由来する墓室壁画の導入を図った結果、本来的には多種多様な内容を有する墓室壁画を狭い空間内に半ば強引に押し込めることになったと考えられる。そのように描画空間が著しく制約を受けるなかで、飛鳥時代、高麗・朝鮮時代ともに、皇帝中心の支配理念を象徴するものとしての星宿、四神、十二支像を壁画の中心的対象として選択したことになる。その背景として、強大な中国王朝の周辺に位置し、かつそれに対峙する必要に迫られる、という共通した歴史的環境を双方の社会に見出すことが可能と考える。いずれにしても、ここで示した朝鮮半島における王陵の基本スタイルの存続とそれに対する律令期以降の日本の王陵（天皇陵）の衰退という対比自体は、東アジアにおける王陵の歴史的意義を探るうえで、今後も重要な視点になっていくものと思われる。

そのうえで、高麗・朝鮮時代の墓制では墓碑や墓誌が豊富に残されており、朝鮮時代では王陵にかんする詳細な史料も数多く残されている点が注目される。それらの諸史料からは、朝鮮半島では、鎮護国家のためのさまざまな儀礼が挙行される中で、依然として王陵の造営と祭祀が社会的なデモンストレーションとして大きな意義を有したことがみて取れる。とりわけ、朝鮮時代の葬礼の絢爛さは絵画資料からも如実にうかがうことができ、また定期的に実施される王陵への行幸も「王道統治を具現化する方法の一つであった」と評価されている¹⁷。こうした王陵をめぐる豊富な文字・絵画資料が示す世界は、東アジア各地域、各時代の王陵の性格を考えるうえでも、極めて重要な情報を提供することになる。

一方で、日本の古墳では、文字文化が普及する飛鳥時代においても墓誌はほとんど残され

ておらず、被葬者や埋葬に関する文字情報は8世紀以降に完成した『古事記』や『日本書紀』、『続日本紀』等によって断片的に得られるのみである。時代や地域も異なることは自明のことであるが、飛鳥時代と高麗・朝鮮時代の墓制の間に横たわる共通性に着目することで、文字情報がより豊かな高麗・朝鮮時代墓制をめぐる社会的・政治的脈絡を飛鳥時代の墓制の理解にも参照できる部分が少なからず存在するものとする。

謝 辞 本研究の遂行にあたっては、カウンターパートナーの申涼宇氏をはじめとする韓国国立文化財研究所の皆様、発掘交流期間中に滞在した国立慶州文化財研究所の各位から、多大なるご協力とご支援を賜った。韓国人でもめったに訪れることのないような山中の壁画古墳や王陵の踏査にもご同行いただき、また多くの資料や情報をご提供いただいたことに対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

註

- 1 本事業を実施した文化庁では、高松塚古墳の埋葬施設を石室と呼ぶが、考古学的には横門式石槨と呼称する場合が多い。文化庁の事業上は、「石室解体調査」であるが、ここでは高松塚古墳やキトラ古墳の埋葬施設については、「石槨」の名称を用いることとする。
- 2 松村恵司・廣瀬 覚・岡林孝作・相原嘉之「高松塚古墳の石室解体に伴う発掘調査」『日本考古学』第27号、2009年。
- 3 来村多加史「谷を兆域とする飛鳥の陵墓に関する考察」『関西大学博物館紀要』第10号、2004年。
- 4 高野陽子「終末期古墳の新たな墳丘形態－段ノ塚式古墳の出現と意義－」『古代探求』中央公論社、1998年。
- 5 統一新羅の王陵比定の真偽について問題があることは自明のことであるが、ここでは混乱を避けるため、現比定の名称をそのまま用いる。
- 6 岩瀬 透「十二支像の系譜について－獸頭人身像を中心として－」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』7、2002年。
- 7 国立安東大学校博物館『丁叅夫婦의 무덤과 出土遺物』2010年。
- 8 文化財庁『旧禰陵章敬王后初葬地保存・整備報告書』2008年。
- 9 山内弘一「李朝初期における対明自尊の意識」『朝鮮学報』第92輯、1979年。
- 10 奥村周司「高麗の園丘祀天礼と世界観」『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版、1997年。
- 11 河南市禅法寺の薬師如来坐像（宋・太平二年＝景宗二（977年））や普賢寺（1044年建立）の九層石塔などの石像物銘文中には、高麗国王に対して「皇帝」号が使用されている。ただし、対外的な場面や国内の正式な場での称号には「王」が用いられており、その背景にはやはり自尊意識とその抑制という両者の側面が存在したことが指摘されている。
- 12 山内弘一「李朝初期における対明自尊の意識」（前掲註9）。
- 13 菱田哲郎「奈良・平安時代の陵墓」『季刊考古学』第124号、雄山閣、2013年。
- 14 田中 聡「『陵墓』にみる『天皇』の形成と変質－古代から中世へ－」『「陵墓」からみた日本史』青木書店、1995年。
- 15 都出比呂志『王陵の考古学』岩波新書、2000年、p.172。
- 16 ただし森平は、王朝・民族の自尊意識や自己中心の世界観が元来、東アジアにとどまらない古今東西に普遍的なものであることを踏まえる必要性を強調し、高麗王朝の自尊の論理を、「内帝外王」の二重体制や多元の天下観といった華夷秩序の表面的アナロジーでもって説明することに警鐘を鳴らす。森平雅彦「朝鮮中世の国家姿勢と対外関係」『東アジア世界の交流と変容』九州大学出版会、2011年。
- 17 ハン・ヒョンジュ「朝鮮初期における王陵祭祀の整備と運営」『陵墓からみた東アジア諸国の位相』関西大学文化交渉学教育拠点、2011年。

上記以外の参考文献

東 潮『高句麗壁画と東アジア』学生社、2011年。

キム・サンヒョプ「朝鮮王陵における玄宮の造成方法」篠原啓方編『陵墓からみた東アジア諸国の位相』所収。

黒羽亮太「＜円成寺陵＞の歴史的位置」『史林』第96巻第2号、2013年。

篠原啓方編『陵墓からみた東アジア諸国の位相』関西大学文化交渉学教育拠点、2011年。

玉田芳英・高橋克壽編「特別史跡キトラ古墳発掘調査報告」文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立橿

原考古学研究所・明日香村教育委員会、2008年。

奈良県立橿原考古学研究所編『壁画古墳高松塚 中間報告』1972年。

楊 寛（尾形勇・太田侑子訳）『中国皇帝陵の起源と変遷』学生社、1981年。

（韓国語）

金元龍『韓国壁画古墳』韓国文化芸術大系 1、一志社、1980年。

国立文化財研究所『坡州瑞谷里高麗壁画墓発掘調査報告書』1993年。

国立文化財研究所『江華碩陵』2003年。

国立文化財研究所『江華高麗王陵』2007年。

国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅰ、2009年。

国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅱ、2011年。

国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅲ、2012年。

国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅳ、2013年。

国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅴ、2013年。

国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅵ、2014年。

国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅶ、2014年。

国立中原文化財研究所『原州桐華里盧懷慎壁画墓発掘調査報告書』2009年。

이근직『新羅王陵研究』学研文化社、2012年。

장경희『高麗王陵』芸脈出版社、2008年。

挿図出典

第1図：（上）国立中原文化財研究所『原州桐華里盧懷慎壁画墓発掘調査報告書』2009年。

（下）奈良県立橿原考古学研究所編『壁画古墳高松塚 中間報告』1972年。

第2図：森本 徹編『ふたつの飛鳥の終末期古墳』大阪府立近つ飛鳥博物館平成21年度冬期特別展、2010年。

第3図：国立文化財研究所『江華碩陵』2003年を改変。

第4図：国立文化財研究所『朝鮮王陵総合学術調査報告書』Ⅴ、2013年を改変。

第5図：朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』第七冊、1920年（名著出版1978年復刻）。

第6図：国立安東大学校博物館『丁聃夫婦의 무덤과 出土遺物』2010年。

第7図：（左上）奈良文化財研究所提供。

（右上）国立文化財研究所『坡州瑞谷里高麗壁画墓発掘調査報告書』1993年。

（左下）杭州市文物考古所 臨安市文物館「浙江省臨安五代吳越国康陵発掘簡報」『文物』2000年第2期、2000年。

（右下）福建省博物館 三明市博物館 尤溪县博物館「福建省尤溪麻洋宋壁画墓清理簡報」『考古』1989年7期、1989年。

第1表：筆者作成

한일 왕릉 및 벽화고분의 비교연구 서설
-飛鳥(아스카)시대와 고려·조선시대를 중심으로-

廣瀬 覚 (히로세 사토루)

요 지 飛鳥시대 말에 축조된 キトラ(기토라)고분, 高松塚(다카마츠즈카)고분이라는 2기의 벽화고분의 특징은 협애(狹隘)한 석곽 내에 중국 유래의 星宿(별자리), 四神, 十二支像 등을 그린 점이다. 실은 이와 유사한 벽화고분은 고려시대나 조선시대 전기에도 존재한다. 小論에서는 벽화고분과 밀접한 관계가 있는 왕릉의 방식을 포함해, 飛鳥시대와 고려·조선시대의 묘제를 비교하여, 시대나 지역도 다른 양자 사이에서 서로 비슷한 벽화고분이 출현한 배경을 살펴보았다.

양자의 묘제의 기본적인 공통항으로는 첫째, 입지 선택에서의 풍수사상의 영향과 함께, 매장시설의 소형화, 즉 「槨」化의 진행을 지적할 수 있다. 飛鳥시대, 고려·조선시대의 벽화고분은 이렇듯 「槨」화된 협애한 매장공간에 반해, 본래적으로는 다양한 내용을 가진 중국 유래의 벽화를 반강제적으로 집어넣을 필요가 있었다. 이 때 飛鳥시대, 고려·조선시대 모두, 불가결한 묘화(描畵)대상으로서 星宿, 四神, 十二支像을 선택한 것이 된다. 거기에는 쌍방의 사회에 황제를 중심으로 하는 중국 유래의 지배관념에 바탕을 둔 자국 내의 정치적 지배를 강화하고자 하는 공통된 정치적 자세가 존재했던 모습을 엿볼 수 있다.

거대한 唐에 대치할 수 있도록 그 정치기구나 예제(禮制)의 도입을 노린 飛鳥시대와, 같은 모습으로 송·원·명과 관계를 맺던 고려·조선시대에서, 중국에 대한 정치적 자세에 일정한 공통성이 있으며, 중국적인 왕릉예의 지향도 그 일환으로 평가할 수 있다. 이 점이야 말로 대국적(大局的)으로는 飛鳥시대와 고려·조선시대에 유사한 묘제가 생겨난 요인으로 판단된다.

주제어 : 飛鳥시대, 고려시대, 조선시대, 왕릉, 벽화, 星宿, 四神, 십이지상, 석곽

Introduction to Comparative Research on Japanese-Korean Royal Tombs and Tombs with Murals: Centering on the Asuka and the Goryeo/Joseon Periods

Hirose Satoru

Abstract: Characteristics of the Kitora and Takamatsuzuka Tombs, two tombs with murals built at the end of the Asuka period, are the Chinese-derived astronomical constellations, the four directional deities, and images of the Oriental zodiac depicted within very narrow stone compartments. Similar tombs with murals in fact exist for the Goryeo and Early Joseon periods. In this contribution, through a comparison of the burial systems of the Asuka and the Goryeo/Joseon periods, including the forms of royal tombs that were closely related to mural-decorated tombs, a search was made for the backgrounds from which similar types of tombs with murals emerged, in different ages and regions.

As basic items in common between these two burial systems, first of all, in addition to the influence of *feng shui* philosophy in the choice of location, a trend towards diminutive size of the burial facility, in other words the progressive transformation of the burial chamber into a stone compartment, can be pointed out. Mural-decorated tombs of the Asuka and Goryeo/Joseon periods were thus partly forced to press the Chinese-derived murals, which originally had a variety of contents, onto the confined burial space produced by this trend towards stone compartment burials. In so doing, in both the Asuka and the Goryeo/Joseon periods, the essential mural elements of constellations, four directional deities, and Oriental zodiac images were selected. From this it can be perceived that in both societies, a common set of political forces apparently existed which tried to strengthen political control within their domestic realms, based on Chinese-derived principles of rule centered on an emperor.

The Asuka period, in which the political organization and manners of Tang China were adopted in an attempt to become capable of confronting that vast empire, and in the Goryeo/Joseon periods which similarly faced the Song/Yuan/Ming dynasties, there is a constant element of commonality in the political posture vis-à-vis China, and the attraction to Chinese style royal tombs can be assessed as one part of this. In the larger picture, this can be regarded as the factor which produced similar burial systems in the Asuka and Goryeo/Joseon periods.

Keywords: Asuka period, Goryeo period, Joseon period, royal tombs, tomb murals, astronomical constellations, four directional deities, Oriental zodiac images, stone compartment tombs